

にいがた 緑百年物語

第18号
2008.Spring

緑百年物語
100
GREEN One Hundred
Niigata

にいがた緑百年物語 会報

緑を未来へ

人物クローズアップ「火坂雅志」

『せきゆかいはつ 縄文の森』整備事業

石油資源開発株式会社 長岡鉱業所 / 大谷 誠

子どもと地域と地球をつなぐ「学校の森」

NPO法人学校の森 理事長 / 山之内 義一郎

子ども達を育む新潟大学(五十嵐の森)キャンプ場

新潟県野外教育研究会副会長 新潟市レクリエーション協会・青空ほーけん塾 / 佐藤 圭輔

●歴史ドッキング / 新炭林の生い立ち / 小林 正吾

●連載エッセイ / 水の旅人 / 鈴木 寿行

●なるほどドッキング / 教えてクイズ ホントのこと

●「全国豊かな海づくり大会」守り人作品の紹介

●地域の団体の活動 / 山北地区緑の少年団

里山環境づくりネットワーク

新潟県山野草をたずねる会・植生研究会

エコトピア上越

ふるさとの清津川を守る会

●事務局からのイベントの報告

にいがたの自然はたからもの

『せきゆかいはつ縄文の森』整備事業

石油資源開発株式会社
長岡鉱業所
大谷 誠

〜里山の復元をめざして〜

当社は、平成十七年十二月に創立五十周年の節目を迎えたことを機に、これまで事業活動にゆかりのある地域を対象に、社会貢献活動として地球温暖化防止に向けた森林整備事業に取り組むこととしました。

平成十七年秋には、秋田県由利原油・ガス田の周辺域である由利原高原の由利本荘市有地内で、平成十八年秋には北海道勇払ガス田の周辺域である苫小牧市の国有林内においてそれぞれ森林整備事業に着手しております。

県内におきましては、新潟県が推進する企業貢献による地球温暖化防止対策としての森林整備に協力するものとして、平成十九年四月より北蒲原郡聖籠町地内の県有地を借り受け、関連会社の日本海洋石油資源開発株式会社と共同で森

林整備事業を開始しております。

当該地は、日本海洋石油資源開発株式会社の事業所近傍で、新潟・仙台間天然ガスパイプラインが敷設されており、沖合には岩船沖油・ガス田海上プラットフォームがあるほか、3月上旬より新潟東港から約8kmの聖籠沖で海洋掘削装置「第五白竜」による掘削作業が開始されています。



「大きく育て」と心を込めて—
樹橋社長と関野小学校児童。



引き続き、同年十月には当長岡
 鉱業所が所在します長岡市関原
 町地内におきましても、新潟県が
 推進する森林整備事業と併せ長
 岡市が進める西部丘陵東地区の
 森林・緑化保全計画に協力するも
 のとして、岡市が所有する土地11
 98 ha(植樹対象地4.96 ha)に、
 今後3年間で約一萬本のエノキ、
 ケヤキ、コナラ、ヤマモミジ等の広
 葉樹を植樹する「縄文の森」計画
 をスタートいたしました。去る十
 月十八日には、当地において新潟
 県神保副知事、長岡市森市長をは
 じめとした新潟県、長岡市関係者、
 長岡市立関原小学校四年生児童
 の他、当社関係者等の総勢約一九
 〇名にて植樹祭を挙行了しました。

「縄文の森」は、関越自動車道
 長岡ICの西方約2kmに位置し、
 近隣にネーミングの由来となった
 縄文時代の火焔土器が出土した
 馬高・三十稲場遺跡がある他、新
 潟県立歴史博物館、国営越後丘
 陵公園が付近に位置する等、多く
 の皆さんが集う場所であり、地域
 住民の森林浴散策・森林観察の場
 として利用していただきたいと思います。



植林案内標柱
 —私たちは、里山の復元により
 地球温暖化対策に取り組んでいます—

この「縄文の森」は、「私たちは里山の復元に
 より地球温暖化対策にとりくみます」をキャッ
 チフレーズに、森林・緑化保全、里山の復元を通
 じて、地域社会に貢献していきたいと考えてお
 ります。
 植栽した樹木が大きく生育するまでには、数
 十年の長い期間を要しますが、素晴らしい森と
 して里山が復元されるよう、私たちが大切に守
 り育てていきたいと思っております。



学校の森

子どもと地域と地球をつなぐ
「学校の森」

緑を未来へ

県民が世紀をかけた大事業の開幕の1年前、二〇〇〇年八月五日に

「にいがた緑の百年物語序章」というプレ・イベントが東京・表参道「新潟館ネスバス」で開催された。新井満さんとトーク・ライブを行った時である。新井さんは開口一番に「学校の森」は、(にいがた緑の百年物語)の原点だと話された。私にとって、「学校の森」づくりの真意をほんとうに理解している人に初めて出会った、忘れられない出来事になった。

今日の、混迷する教育界、人々のつながりが切れてゆくコミュニティ、深刻化する地球環境問題の現状に対応する道は、教育経営者のできる唯一の

の裁量権—子ども達、地域社会、住民、学校の実態に立って、経営実践を進めることだと考えた。

子ども達のために、四季の移ろいを樹々と身近にふれあい、体験できる「学校の森」を作らなければ、と思つた。こうして森づくりに参加した子どもと教師を始め、親や住民、企業、行政の一人一人に、それぞれの新しい「物語」が生まれた。子ども達は内発的な学びを生み、それを支援する学校、親、住民、行政、企業は、「学校づくり」と「地域づくり」



NPO法人学校の森
理事長

山之内 義一郎

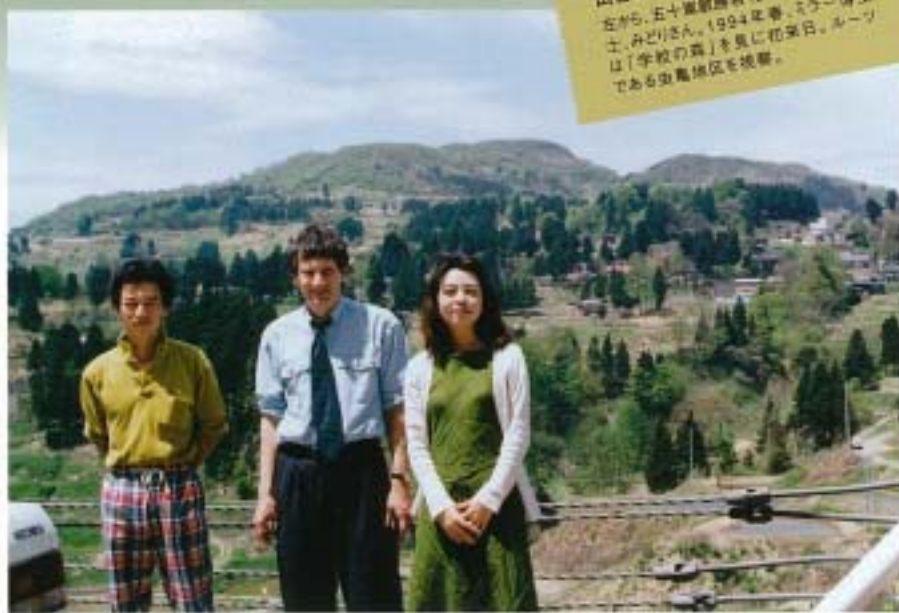


幼木に寄る
水々と呼び、自然に育りが
生まれる子ども(2年生)。

学校の森 (川崎の森)

校門より西む。1988年9月27日、多摩市川崎小学校の校舎約600㎡のマウンドに87種412本の幼木を移植して作った「学校の森」第一期。

山古志村虫亀を訪問
左から、五十嵐敬典君(女亀)Jrミラー博
士、みどりさん、1994年春、ミラー博士
は「学校の森」を共に花見日、ルーツ
である虫亀地区を視察。



の必要性を実感することになった。
また、新しい学校後援会ともいうべ
き「森の会」を設立する糸口にもな
り、人々の考え方を転換するきっか
けになった。

見に来日された。森を「目見て」「こ
れは日本のホリスティック教育！」
と直観され、帰国後は「学校の森」
の実践思想を著作や研究会・国際
会議で発表している。韓国のように、
富川市、仁川市、ソウル市で行われ
た研究会・国際会議への招待や相互
交流など十回余の実践研究を深め
たこともあって、今や国を挙げた「学
校の森」づくりの国民運動にまで発
展している。

二〇〇七年八月
には、国連で決議
した「持続可能な
開発のための教育
の10年」(ESD)
の国連キャンペーン、
環太平洋国際会
議で、「学校の森」
づくりの公開フォー
ラムを実施し、森
の実践思想は世
界へ向けて発信さ
れた。しかし、国内
の「学校の森」づ
くりは、肝心な学
校教育、教育行政
にはそう簡単には
伝わって行かない。
ところが山田養
蜂場の山田英生
社長のよう、「森

をつくった校長」(春秋社)は「企業
のコンセプトや業務の姿勢を理解す
るために必ず読んでもらいたい本だ」
と、社員(五〇〇人)の必読書に推
薦したり、自社の森づくりを皆で進
めたりするなど、森のいのちの「つな
がり感」を生かしている企業もある。

昨年、遠山敦子元文相は森の中
にお入りになり、「樹々に覆われ、自
然の営みを学べる工夫がなされた
森を拝見して、子ども達の笑顔と
歓声と探究心に輝く眼が、直ちに
想像できました」「人間が自然の中
で学べることは万巻の書に匹敵し
ます。いや、書からは学びえないこと
を悟ることができます。」「現代の
子ども達にはこの体験は不可欠で
す」と、感想を述べられている。

こうして、小さな「学校の森」づ
くりは、大きな緑の未来へとつなぐ
発信基地になりつつあるのを実感
するのだ。

※この実践思想をさらに拡大する
ために、今年度は「学校の森」づく
りボランティアの養成講座を立ち上
げ、学校をコアにした関係者の方々
の学ぶ場を作る予定である。
教材にDVDを活用願いたい。

「学校の森」づくりの
DVDが完成。



遠山敦子元文相の訪問
当社本社裏のご案内で「学校の
森」(虫亀の森)を訪れ、深く感動
された。



森の中で開会する
「学校の森」国際フォーラム
富山市長の熊谷後洋、富田
新潟市長の挨拶。

新大の

子ども達を育む新潟大学 (五十嵐の森)キャンプ場



新大・五十嵐の森キャンプ場整備で青大将と蛙を捉える。

体長十五センチほどの丸々太った大きな雨蛙が右足のつけ根まで、かなり大きな蛇(青大将かな?)に飲み込まれて、地面に両手で必死になっ

て踏ん張り逃れようとしています。一方、蛇の方も負けじと草むらの

方へ引き寄せようと、両者格闘しているところを、「緑の学校」ネイチャーゲームに参加した、ぼーけん塾の子ども達と一緒に発見しました。

蛙の右足のつけ根はかなりの出血で、子ども達の間から「かわいそう、どうにかならないの!」「両方とも逃がしてやれば」との声に押され、私が棒で蛇のお腹の辺りを強く叩いたら、右足を飲み込んでいた口を一瞬間開きました。

そのすきに蛙はからくも逃げるこ

とができたのです。
見ていた子ども達は、「様に」「ああ、良かった」の表情を見せたのですが、「でもこれで良かったのだろうか?」「アでもこれで良かったのだろうか?」

と疑問を投げ掛けてみました。
右足に大きな咬傷を受け、血を流しながら逃げた蛙は、果たして、「生きていけるだろうか?」「たぶん細菌に感染してダメだろう。」

せつかくの獲物を取り逃がした蛇は空腹で、また次の獲物を狙うだろう。



全員集合!

もしこの蛇がマムシのような毒蛇

で「君達を襲ったらどうする?自然界のことは自然に任せておくのが一番良いと思うよ」と私が話すと「納得したようなしなないような顔を

して神妙に聞いていました。
子ども達の「生きる力」を育む「新大・五十嵐の森キャンプ場」は「緑の募金・森づくり事業」の支援をいただき未来に向かって着実に育っています。

「新潟県野外教育研究会」とは

新潟大学教育人間科学部大橋正春教授を会長に、学校教育や社会教育に関わる人や、野外活動をこよなく愛する人が集まり、野外活動を目的として発足した会です。つまり、野外活動の専門家(?)の集まりです!

現在三十名程度の会員が年数回の研修会や総会、野外活動を通して楽しく活動をしています。主な年間のイベント活動は、夏の五十嵐の森キャンプ場整備&キャンプ、秋のチャレンジヤーキャンプ、冬のスキーキャンプなどです。

また、野外活動に興味のある方、一緒に活動してみませんか?会員は、随時募集しています。お問い合わせ、お申し込みは大学研究室までお願いいたします。



新潟県野外教育研究会副会長
新潟市レクリエーション協会
青空びーけん塾

佐藤 圭輔

夕食タイム



こしじの森女性の会副会長
社にいがた緑の百年物語緑化推進委員会 理事
木津 輝子

ボランティアの力を借りながら 山に入る



太古の昔から、森林はあらゆる生命に多くの恵みをもたらすし、人々はその森林を財産として共生することを継承してきました。緑百年物語は、森とともに母なる川の役割についても思いを馳せ、県民の掛け替えのない財産である森林を次代に引き継ぐための運動を目的として発足しました。川上から川下までの役割を県民一体となって広く関心と理解を求め、向上を図るとともに前進していかなばと思います。

普段私達が当たり前の様に森林からの恩恵を受け、安全で快適な生活ができるのも、水源涵養や山地災害防止のために山の管理をしてきた山林保有者のおかげです。しかし、今日低迷し続けている林業の現状は後継者不足をもたらすし、さらには様々な要因で高齢化・過疎化が著しく進み、森を愛する人々の減少に繋がっています。林業農家の大半が自力努力できず、維持管理・活性を図るだけの余力が皆無に等しいと言っても過言でないとするれば、山は荒廃し続け、私達に大きな支障をもたらすのではないかと

懸念しています。

そこで私は、これからはボランティアの力が担い手として大きな活力源になって、森を守り育てていくのではないかと考えています。ボランティアの方々には、森林から受けている恩恵を理解し活動し続けて頂きたいと思っています。

私も微力ながら、昨年からは始まった森林創りに地域の方々とともに参加し、伐採・地ごしらえ・植林に汗を流しながら頑張っております。玉切った山の様に積んであった木々がアツと言う間に片付いたのは、さすがでした。やはり大勢が丸となって作業することのすこさを身をもって痛感し感涙いたしました。小さな取り組みでも、継続は力なり。小さな輪から積み重ねて大輪を咲かせられる様に私なりに奮起し、広く人々に緑化思想と森林保全を喚起したいと思っています。

生命の源泉であり、日々のストレスを癒してくれ、新鮮な感動も与えてくれる森を一度再認識して、是非とも山に馴れ親しんで頂けたらと切に願っております。

◀「神ひさゆ 世を中山の紅葉坂」
平成19年(2007)10月吉日



▼ 縄文時代中期の住居(右)と伊勢(左)(復元、秋葉区小口)



里山に茂る雑木林は伐り株から発生する萌芽(ひこばえ)が育って再生した広葉樹林です。ひと昔前までは、薪炭林とも呼ばれて、もっぱら焚き木(薪や柴)などに向けられ人々の暮らしを支えてきました。

薪炭林の歴史は長く、遙か縄文時代にさかのぼります。よく知られているように、この時代に、私たちの祖先が初めて火を使って土器を焼き、食材を煮炊きする食文化を身につけました。それは森の木が燃料として利用された歴史の始まりでもありました。

以来、里山の薪炭林は、匠氏の暮

薪炭林の生い立ち

～日本民族の自然・文化遺産～

常任理事 小林 正吾

歴史 TOPICS

▼ 萌芽によって再生したかつての薪炭林



らしには欠かせないバイオ資源として伐採・再生が繰り返され引き継がれてきました。

人々は薪炭林を利用する一方で、再生のための手入れ(もやかき、つる切り、枝打ち、間伐など)を怠りませんでした。そのために再生林には陽光が差し込み多くの生物が共存する明るい環境に保たれてきました。

太平洋戦争を境にしてその里山の姿が一変しました。多くの薪炭林が伐り払われスギ林に変えられました。さらに燃料革命によって御用済となった薪炭林は、それまでの利用伐採の適齢期とされた林齢を遙かに越えて、高齢化に向かっていきます。

いまでは薪炭林は、過ぎし時代の語り草になってしまいましたが、「森が人を育み、人は森を慈しむ」そんな絆の中から育まれた日本独特の自然・文化遺産だといえることができようかと思えます。



▼ 伐り株から伸びた2年生の萌芽株

あるいは、薪炭林は、過去の遺産ではなく、地球温暖化に立ち向かう人間の生き方を示唆する未来型の自然・文化モデルかもしれません。

なお、本県の薪炭林の現状については、調査報告書「新潟・里山の広葉樹林」が本委員会から出版されています。

水の旅人



この物語は、たまたま、ある人物の身に降りかかる。その人物が天寿を全うするその瞬間に、偶然にも、そこに居るある「水」の仲間達の物語である。

冷たく冷えたワインをグラスに注ぐ。しばらくするとグラスに水滴がつく。

空気が水に戻る瞬間だ。

人の身体の3分の2、体重の60〜70%は「水」である。

人は、水を飲みます。水は、体内を駆け巡り、ひと仕事終ると汗等で外へ出ます。そして空気となりまた、水となる。

人の命には限りがあります。そう、人は、死にます。間違い無く、確実に。人は死を迎えると3分の1は、燃えカスに、そして3分の2は、住み慣れた身体を離れ水蒸気となつて天に戻ります。大気となり大地となる。そして風となり、雲となり世界を駆け巡りまた、大河の一滴となり、命となる。

そんな事の繰り返しを何千年とくり返して、この世のすべての生き物たちは進化して来た。

金は天下の回りもの

「これこそが真実と言えるものがこの世にあるのだろうか」という頃の一節がある。俺らの旅も川を伝って山から里へ海へ、と、途中いろいろ寄り道しながらもう何回昇り下りしただろう。

最近は何話ばかりが聞こえてくる。金は天下の回りものというが、おれたち水に似ているが、ここんところ人間たちが騒いでいる道路特定財源とやらの一般財源化や暫定税率の見直しだの、なんだかにぎやかだ。お金を水に例えると、今まで飲み水として、皆で我慢して溜めてきたダムの水を他のことに使おうという事らしいが、なにやら良く調べてみると一部のダムの職員はその水を横流しして自分達だけで使っていたらしい。これは皆の飲み水だから他に使用せろという政党と、いやダメだという政党。今まで長い事我慢してきた地方の知事たちも、それじゃあ不公平だと水のうばいあい合戦。おいらはただの「水」だから、むずかしい話はよくわからないが、どいつもこいつもいー加減にしろつーの。一番可哀想なのが一般市民たちで、「どちらにしても、水が足りなくなるので、1人バケツに3杯水をくんで来い」と、また簡単に決められるんだらうな。

じゃあその水はどこから来るのか？と聞けばおれたち本物の「水」でさえ最近はおれたち本物にできてくるのに、「水」は自然にできると思っている奴らがまだまだ多い。どこかのテレビ

のコーナーでも言っていたが、地球上で必要な「水」は、工場では造れません。「水」の工場は、森です。と、当たり前だが。

「バケツに3杯!?」それでもくても仕事は減り、石油や食物も、よそからの輸入に頼っているから物は値上がりしているのに、さらに「バケツに3杯!」冗談じゃない。こっちの水も簡単に造れません。つて事を市民はよく知っています。

老後のために本当に飲まず食わずで我慢して溜めた命の水もいったいどこへ消えたのか、いったいどうするのだろうか?

政治の事は知らないが、与党も野党も官僚も全てがそうだと聞かないが、どっちもどっちの「水掛け論」天下り、環流、我田引水、湯水のごとく、横流し、水増し、水に流す。何か俺たち「水」に関する言葉もイメージ悪いよな。

これも人に聞いた話だが、イギリスの元首相ブレアさんが、このあいだ日本に来た時の事だが、民衆も個ではなく事を興す、革命を興すには集団にならなくてはいけないとかいう主旨の事を言っていたそうだが、正にそのとおりじゃないかなと思う。

たかが「水」ごときの私でも、世界中旅をした時の事や、世界中の「水」の仲間から言わせると、おおよそ日本人という人種は、過去によつて辛く辛く思っていたのかかわらないが、我慢強いと言ふよりも、「怒り」とか

「怒る」という事を忘れてしまったのじゃないかと思うほどおとなしい。それじゃ、お役人に何をやらせてもしょうがない、彼らのやりたい放題になつてもしょうがない。

俺たち「水」だって一滴じゃ何もできないが、皆が集まれば、相当な事ができるって知ってるぜ。

ちよつと物騒だが、そろそろ人の良い日本人も(市民も)怒る時じゃないのかね。海外だったら暴動が起こっても不思議じゃないよ!

そんな事は知っているが日本の「水」として言うが日本人は、もつと賢く静かに見守ってジツと時を待っているんだよ。きつと賢い人が:

それでもだめならこの俺様が、「水返せ運動」でも始めるから。中身は簡単、今まで使った分を返せという事と、これから使う分はもろん私わなというシンブルな運動だ。このくらいシンブルでインパクトの有る運動じゃないと、頭の硬いお役人には伝わらないから……。どう?

そして山に木を植え森を造る。世界中に森を造る、造つて造つて造りまくる。世界中の危機感を持って「水」や人々と一緒に、広い宇宙で、この俺たちの地球が末永く生き残れるように。

平成19年度イベントの報告

緑の百年物語フェスティバル・ 第17回上越グリーンフェスティバル

21世紀に百年をかけて、木を植え、
緑を守り育て、22世紀に緑の遺
産を贈る「にいがた緑の百年
物語—木を植える県民運動」
としてのメインイベントは7回目
をむかえ、平成19年10月13日(土)上
越市大潟区の「大潟キャンプ場」を
主会場として開催されました。今
回は第17回上越グリーンフェ
スティバルと共催で、参加者
は総勢700人。記念コンサート、緑の百年物語
宣言、緑化功労者表彰、エコ風船飛ばし、クロ
マツ500本の植樹、松葉さらげ体験、クイズラリー
や木工細工などを行ないました。予定されていた「地引綱」の体験は高波のため、中止になり
ましたが、漁師さんから貴重な説明を聞きました。



▲花の種を入れたエコ風船をみんなで飛ばしました。



▲海辺で「地引綱」の説明を聞きました。



▲松葉さらげ体験



▲クロマツ苗を植樹



▲植樹作業真っ最中!



◀大きく育ってね。(左)
チッパー(破砕機)(右)

にいがた海の森の集い

「海岸の森林を未来へ引き継ごう」と今年で2回目
をむかえる「にいがた海の森の集い」が平成19年9月
22日(土)新潟市西区上新栄町と青山で開催されまし
た。海岸林は、飛砂や強風を防ぐとともに、動植物の
生息する環境や地域の皆さんが自然とふれあう場の
提供など、多様な役割を担っています。総勢800人の
参加者は各エリアに分かれ、枝落し・除伐・下草刈りな
どの森の手入れやハマナスの植樹やシロダモなどの植
植に汗を流しました。また、資源として有効活用するため、
作業で出た枝をチッパー(破砕機)で細かくし、林内に
敷き詰める作業も行いました。

多くの方のご参加、ご協力、ありがとうございました!

「にいがた緑の百年物語フェスティバル」「にいがた海の森の集い」は
平成20年度は合同開催となります! ぜひ、ご参加ください!